

Philippines

KFAW スタディツアー 2014

フィリピンで学ぶ国際協力

報告書



期間：平成 27 年 2 月 23 日（月）～ 3 月 4 日（水）9 泊 10 日



日比国際児と母親たちとの交流会



先住民族の家庭にホームステイ



先住民族の子どもたちとの交流



公益財団法人

アジア女性交流・研究フォーラム

KFAW

KITAKYUSHU FORUM ON ASIAN WOMEN

目 次

1. フィリピン・スタディツアー実施概要	1
2. ツアー日程.....	2
3. ツアー報告書.....	3
4. 参加者レポート	
スタディツアー「フィリピンで学ぶ国際協力」に参加して【中尾啓子】	24
スタディツアーの感想【出口香純】	29
フィリピンはとても豊かであたたかい国【服部優里】	32
5. ツアー参加者の感想	34

KFAW スタディツアー2014
「フィリピンで学ぶ国際協力」

報告書

1. 内容

平成 27 年 2 月 23 日（月）～3 月 4 日（水）にかけて、KFAW スタディツアー「フィリピンで学ぶ国際協力」を実施した。一般公募により 7 名の市民が参加。フィリピンの女性や子どもたちの関連施設訪問、先住民アエタ族ホームステイ、フェアトレード生産者やスラム街訪問、ジェンダー女性学研究所訪問などを通して、フィリピンの貧困およびジェンダー問題と国際協力について学ぶことを目的とする。

2. 参加者

一般公募による 7 名（50 音順）

内田 菜月
佐藤 由佳
出口 香純
中尾 啓子
原 美南
服部 優里
古川 真有

KFAW 事務局

理事長 堀内光子
企画広報課課長 平井良知

3. 期間 平成 27 年 2 月 23 日（月）～平成 26 年 3 月 4 日（水）9 泊 10 日

フィリピン・スタディツアー スケジュール

日	曜日	時	内容	宿泊
2/23	月	13:20	福岡空港国際線集合	トロピカーナ ホテル
		15:20	福岡発（フィリピン航空 PR425）	
		18:05	マニラ着	
		19:30	ホテル着	
2/24	火	8:00	ホテル出発	プレダ基金
		12:00	プレダ基金着	
		14:00	プレダ基金オリエンテーション	
2/25	水	9:00	少年の家訪問	アエタ族 MAO 村 ホームステイ
		13:00	先住民アエタ族 MAO コミュニティ着	
		夜	各家庭で夕食、ホームステイ	
2/26	木	7:00	MAO コミュニティにてエコ・ツーリズム	アエタ族 MAO 村 ホームステイ
		13:00	小学校訪問、給食ボランティア	
		夜	交流会、ホームステイ	
2/27	金	8:00	MAO コミュニティ発	トロピカーナ ホテル
		12:00	プレダ基金着（昼食）、少女の家訪問	
		17:00	ホテル着	
2/28	土	9:00	DAWN 訪問（日比国際児、母親との交流・昼食）	トロピカーナ ホテル
		14:00	チャイルドホープ訪問	
		18:00	社会的企業（先住民によるカフェ）見学・夕食	
3/1	日	8:00	マニラ市内観光（イントラムロス）	トロピカーナ ホテル
		13:30	スラム訪問、ボランティア（清掃）	
3/2	月	9:30	フェアトレード生産者団体訪問（MANOMANO）	トロピカーナ ホテル
		14:00	マニラ市内の公立小学校訪問	
3/3	火	9:00	ミリアム大学訪問、同大学女性・ジェンダー	トロピカーナ ホテル
		13:00	ホテル着 自由行動（夕食後に反省会）	
3/4	水	7:00	ホテル出発	
		9:45	マニラ発（フィリピン航空 PR426）	
		14:15	福岡空港着	

2月23日（月）

13:30—19:00 福岡空港出発、マニラ到着

福岡空港国際線のフィリピン航空カウンター前に集合し、15:20 発 PR425 便でマニラへ発つ。約3時間45分かけて、ニノイ・アキノ国際空港に到着した。空港で2台のバンに分かれて乗車し、マニラ市街にあるトロピカーナホテルへ移動した。

約30分程度でホテルに到着し、参加者は4人部屋と3人部屋に分かれた。20:00にロビーに集合し、参加者全員で両替店へ行って円をフィリピンペソに両替した。その後、ホテル横の中華レストランで遅めの夕食を取り、各部屋に解散した。



ホテルの部屋



ホテルのロビー

2月24日（火）

8:30—12:00 プレダ基金へ

トロピカーナホテルでバン1台に9人乗車し、虐待や刑務所への不当収容、商業的搾取等の被害にあった子どもたちの保護を目的に活動する「プレダ基金」に向かって出発した。車に乗って2時間程度でプレダ基金に到着し、参加者は3人部屋と4人部屋に分かれた。荷物を部屋に運んだ後、食堂に集合して昼食をとった。



プレダ基金に到着



プレダ基金のホール&食堂

14:00-17:00 プレダ基金オリエンテーション

プレダ基金の会議室でオリエンテーションを実施。プレダ基金は1974年にアイルランドのカレン・シェイ神父により設立され、虐待や刑務所への不当収容、商業的搾取等の被害にあった子どもたちを保護している。被害を受けた子どもたちへの法的な支援、カウンセリング、セラピー、技術トレーニングを通じて子どもが子どもらしく生きる環境を取り戻す支援活動が行われている。また、子どもたちへ支援のほか、先住民アエタ族に対する支援やフェアトレード製品の販売等も実施。ノーベル平和賞に過去3回ノミネートされるなど、その活動は国際的に評価されている。

以前は、保護された子どもたちはプレダ基金内で生活していたが、現在は新しく設立された「少年の家」と「少女の家」に移動したため、プレダ基金には子どもたちはほとんどいない。オリエンテーションの後、バンに乗って、カレン神父の案内でプレダ基金周辺の山や海岸沿いを散策した。かつて、フィリピンでは12名の上院議員が声をあげて憲法に「基地を作らない」と明記し、フィリピンからアメリカ軍が撤退した。このことを記録した記念碑が海岸沿いにあり、カレン神父が丁寧に説明してくれた。

夕方にプレダ基金に戻り、夕食をとった。この日はドイツ人の医学生グループも宿泊しており、一緒に夕食を食べながら交流した後、解散して各部屋に戻った。



プレダ基金でのオリエンテーション



カレン神父と記念撮影

2月25日（水）

8:00-11:00 少年の家へ

朝食後、すぐにバンに乗り、プレダ基金が運営する「少年の家」へ向かった。プレダ基金職員のジャキーさんが少年の家およびMAOコミュニティまで同行してくれるとのことになった。少年の家に到着後、オリエンテーションを実施し、施設内を見学した。保護され

ている少年たちのほとんどは苛酷な家庭環境で育ち、窃盗など犯罪により刑務所に不当収容された経歴を持っているが、保護された後は、施設で元気に生活しながら勉学に励んでいる。施設の職員として働く元少年たちも多い。施設内には Emotion room と呼ばれる黄色い部屋があり、壁と床にはクッション性の敷物が取り付けられている。この部屋で泣いたり壁を殴ったりすることで、少年たちに怒りを吐き出させて、自分をとり戻させるというセラピーが行われている。男の子は女の子に比べ感情を表に出さず、難しい面もあるという。



「少年の家」外観



「少年の家」でのオリエンテーション

施設見学の後、ホールに少年たちが集合し、一緒に椅子取りゲーム等で交流した。子どもたちはたいへん人懐っこく、過酷な過去の影響を感じさせなかった。参加者が一人の子どもに漢字を教えたところ、たちまち周りの子どもたちに拡がって、何人もの子どもたちが「自分の名前を漢字で書いて」と集まってきた。漢字を教えると、お礼に色々なタガログ語を教えてくれた。交流会の後、早めの昼食（プレダ基金が準備した弁当）をとった。



黄色に塗装された Emotion room



プレダ基金のジプニー

11:00-13:00 MAOコミュニティへ出発

プレダ基金のジブニー（フィリピン特有の乗り合いバン）でMAOコミュニティへ向かって出発した。途中でホームステイ時の食材を購入するために市場に立ち寄った。同行してくれたプレダ基金のジャッキーさんが各店舗と交渉して鶏肉、野菜、果物、飲料水などの食材を購入。様々な食材をジブニーに積み込み、MAOコミュニティに向かって出発した。通常、MAOコミュニティへは川を迂回して行くのだが、今回は近道になる私有地の道路を通してもらえることになった。ところが、この辺り一帯は舗装された道路ではなく、火山地帯のため火山灰の砂地が多い。少し進んだところで、タイヤが砂に埋まって立ち往生してしまった。砂から抜け出そうと色々試したが、タイヤは空転するばかり。困っていたところに、偶然近くで河川工事をしていた土木作業員の人たちがやってきた。彼らがジブニーを後ろから押してくれたのでなんとか砂地から脱出に成功。その後、しばらく走るとMAOコミュニティが見えてきた。コミュニティの中央を通る一本道を進み、広場に駐車した。



食材を購入した市場



砂地からの脱出

13:00-15:00 MAOコミュニティ到着

MAOコミュニティで生活するフィリピン先住民アエタ族は、ルソン島北部の山間に住むフィリピンの先住民族である。いつどのようにフィリピンに移住してきたかについて、はっきりした記録はないが、研究者によるとボルネオ島から2~3万年前に移り住んできたという説が有力で、フィリピン諸島に住み始めた最初の民族のひとつと言われている。ピナツボ火山周辺にコミュニティを作り、昔ながらの伝統的な生活を維持している。

村の中央には一本の道があり、道の両側に藁葺の民家が点在している。ジブニーから降りて、参加者全員で村長のサルバドール・ディマイン氏の家へ向かった。



MAO コミュニティ



村長（カバドン） 宅

サルバドール・ディマイン氏は「カバドン（村長の意）」と呼ばれている。カバドンからコミュニティの成り立ちや構成人員、地形などについて説明してもらった。MAO コミュニティは3つの村で構成されており、現在 305 家族が生活している。人口は増加傾向にあり、さつまいも、バナナ、パパイヤ、マンゴー等を栽培する農業が行われているが、基本的には山で食料を集めて生活する「森の民」である。医療に関しても、森に自生する薬草等を熟知しており、自分達で薬草を使って怪我や病気に対応しているとのことだった。

現カバドンのディマイン氏は環境保全派で、森の生物多様性を維持したいと考えており、生物多様性に関する国際会議にも出席しているとのこと。村の人たちは慣習に基づく伝統を守って「山の精霊」を信仰している。（山に入るには「山の精霊」の許可が必要であり、カバドンを通して許可を得ることになっている）



カバドンのサルバドール・ディマイン氏



MAO コミュニティの人たち

MAO コミュニティにおける結婚制度についての話も聞くことができた。通常、フィリピンでは女性側の家族が結婚に関する準備を行うことになっているが、MAO コミュニティでは男性側が準備する。結婚の前に3回相手の両親に会う必要があり、そのたびにプレゼントの家畜を準備しなければならない。結婚式には基本的にコミュニティの住民全員が出席できる。新郎の家は、来てくれた人全員にご馳走を振舞い（一回の結婚式のご馳走と

して、牛1頭と豚5頭程度が準備される)、来た人はお祝いの金品を持参して、お祝い金は新郎新婦二人のものになるとのこと。

カバドンのお話が終わる頃、それぞれのホームステイ先の人がカバドン宅まで迎えに来てくれた。参加者はグループに分かれてホームステイ先の各家庭で夕食をとることになった。私たちが市場で購入した鶏肉と野菜で作った「ティノーラ」というフィリピンの家庭料理や各家庭独自の料理を作ってください、美味しくいただいた。



お世話になったフェルナンドさん一家



家の中の様子

2月26日(木)

7:00-11:00 MAOでのエコ・ツーリズム

MAO コミュニティでの2日目はエコ・ツーリズムを体験することになった。カバドンからMAO コミュニティの「聖なる山」を案内してもらうことになり、朝の6時にカバドン宅に集合した。森の中を歩きながら、川の上流にある池まで行って戻ってくるコースで、往復約5時間のエコ・ツーリズムになるとのこと。カバドンのほかに、村の人たち数名と子どもたちも同行してくれることになった。

案内してくれるカバドンと村の人たちは皆、腰に大きな万能ナイフをぶら下げており、森の中で食用の果実や薬草を収穫しながら歩いている。カバドンは火傷や切り傷に効く薬草、食用の果実について、ひとつひとつ丁寧に説明してくれた。途中、カバドンがカシューナッツの大きな木を指差した。通常、我々が食品として目にするカシューナッツは、実は果実の一部であり、ナッツの下には黄色の大きな果実が付いていた。カバドンから食べるように進められたので果実部分を食べてみると、ほんのり甘く、非常にみずみずしい果汁が溢れてきた。水分補給に最適である。ナッツの部分は村に戻ってから鍋で炒って食べるのとこと、子どもたちがたくさん収穫していた。



カバドンの案内で森へ向かう



天然のカシューナッツ果実

山道の途中、子どもたちが野生の鶏を捕獲した。これは村の人たちにとって貴重なタンパク源となる。山道をしばらく歩くと川が見えてきた。川沿いの道を歩いたが、今は乾季のため川の水量は多くなかった。川の上流に目的地である池があるとのことで、約2時間歩いてようやく池に到着した。

池には綺麗な川の水が流れ込み、非常に透明度が高い。村の子どもたちが飛び込んで泳ぎだしたので、日本の参加者からも2名が水に飛び込んで一緒に泳いだ。池で30分ほど休憩してから、帰路についた。出発した朝の8時くらいまでは非常に心地良い気候だったのだが、さすがにフィリピンの真昼の日差しは強烈で、帰路はかなり汗をかきながら村長宅まで歩いた。道中、MAOコミュニティの人たちの自然に対する畏敬の念や、薬草や食用植物の知識などを垣間見ることができた有意義なエコ・ツーリズムだった。



池を目指して歩く



池に到着

12:00-15:00 小学校訪問

エコ・ツーリズムから戻って、カバドン宅で昼食をいただいた。昼食後、少し休憩してMAOコミュニティ内にある小学校を訪問することになった。コミュニティの外れにある小学校は、最近校舎が拡大されて1年生から5年生まで収容できるようになったそうである。

6年生と中学生以上の子どもたちは川を渡った先にある学校に通っているとのことだった。フィリピンの子どもたちは勉強熱心で、小学校低学年の子どもたちも真剣に授業を聞いていた。我々を見ると人懐っこい笑顔を見せてくれた。小学校訪問の後は、寄付で建てられたコミュニティ内の小さな図書館を見学して、一旦各ホームステイ先に戻って休息した。



MAO村の小学校



小学校の子どもたち

17:00-20:00 給食ボランティアと交流会

学校が終わる時間に、村の子どもたちへの給食ボランティアを実施した。村の子どもたちがカバドン宅前の広場に集まってくる。私たちが市場で購入した大量の鶏肉と米、野菜を大鍋2つに投入して約200人分のおかゆを作った。村のお母さんたちがカバドン宅のかまどで調理し、日本から来た参加者全員でおかゆを取り分けた。子どもたちは大人の指示に従ってきちんと並んでいる。参加者全員で手分けして子どもたちにおかゆを配った。塩味のシンプルなおかゆだが、鶏肉は貴重らしく、こどもたちは美味しそうに食べていた。



給食ボランティアの実施



給食を食べる子どもたち

給食ボランティアが終了し、辺りが暗くなり始めた頃、カバドン宅で交流会を行った。カバドンと村の長老たち、ホームステイ先の家族の皆さんが参加してくれることになっ

た。カバドンのご挨拶の後、ツアー参加者から感謝の言葉を述べて、ツアー参加者全員で日本の歌を披露した。照明の無いMAOコミュニティの夜は星がとても綺麗に見えるので『見上げてごらん夜の星を』を歌ったところ、村の人たちもお返しにフィリピンの歌を披露してくれた。参加者の皆さんがすっかり打ち解けて良い雰囲気になってきたので、日本で流行っている踊り（アニメ『妖怪ウォッチ』の妖怪体操）を披露したところ、大いに盛り上がった。満天の星空の元、MAOコミュニティの人たちとの素敵な交流会になった。



夜の交流会の様子



踊り（妖怪体操）を披露

2月27日（金）

8：00－12：00 少女の家へ

各ホームステイ先で最後の朝食を済ませて家族にお別れを言った後、カバドン宅に集合。カバドンにお別れを告げてMAOコミュニティを出発した。みんなでジブニーに乗ってしばらく走ると、プレダ基金が支援している「少女の家」に到着した。昨年完成したばかりの施設であり、現在も大きなホール兼宿泊施設が建設中だった。商業的性的搾取等の被害を受けた少女たちを保護している。最年少で7歳の少女も保護されているとのことだった。この日は十数名の少女が滞在しており、クラスで授業を受けていた。



「少女の家」外観



「少女の家」内部

「少女の家」を訪問した後、プレダ基金に戻って昼食をとった。昼食後、マニラのホテルに向かって出発。ホテルでしばらく休憩し、各自夕食を取った後、参加者全員でホテルの一室に集まってスタディツアー前半の反省会を行った。海外旅行が初めての参加者も数名いたが、通常の旅行では体験できない MAO 村での 2 日間は有意義だったという意見が多かった。

2月28日（土）

9：00－12：00 DAWN 訪問

朝、ホテルのロビーに集合し、徒歩でホテルを出発。日比国際児と母親を支援する DAWN (Development Action for Woman Network) を訪問した。

DAWN はフィリピンに 10 万人以上いるといわれる日比国際児とその母親を支援するため、1992 年に設立された NGO である。日本人の父親と一緒にいられない子どもたちと母親に対し、カウンセリングやワークショップ、技術支援といった支援活動を行っている。当初は、30 人のフィリピン人女性と 42 人の日比国際児を支援することから始まり、現在では約 10 倍の人々が DAWN の活動に参加しているとのことだった。近年は日比国際児以外にも、様々な問題を抱えるフィリピン人移民の支援も広く行っている。



DAWN でのオリエンテーション



DAWN の皆さんと

代表者カルメリータ・ヌキ氏によるオリエンテーションのあと、事務所内を見学した。DAWN では、フィリピン人女性たちが自分たちの仕事を持って収入を得られるように、裁縫や手織り、布の染色等の技術を訓練する「Sikhay プログラム」を実施している。Sikhay プログラムによって作成される手織物作業場を実際に見せてもらった。

作業場には数台の織機が設置されており、様々な手織り製品が作成されていた。DAWN の事務所でも製品を購入できるようになっており、参加者のほとんどがお土産用に色々な商品を購入した。また、DAWN のユニークな活動として、日本での「テアトルあけぼの」という演劇活動がある。日比国際児たちによる演劇活動で、子どもたちの才能や創造

性を高めると共に、子どもたちの抱える様々な感情表現の場にもなっている。

作業場見学の後、子どもたちやお母さんたちと一緒に昼食を食べながら意見交換を行った。



DAWN で製作された Sikhay 製品



Sikhay 製造現場を見学

13:00-18:00 チャイルドホープ訪問

午後からはストリート・チルドレンの支援を行う NGO のチャイルドホープの活動を見学した。家が無く、路上で生活するストリート・チルドレンのために、「ストリート・エデュケーション」と呼ばれる路上での教育活動を実施している。ストリート・チルドレンの多い地域でブロックを決めて担当者を配置し、子どもたちが自らの権利を理解し、自分自身を守れるように、様々な教育プログラムを実施している。

まず、本部でオリエンテーションを受けた後、実際に路上での教育現場を見学に行った。路上の一角で、定期的に子どもたちのための青空教室を実施しているとのことで、この日の授業は「道徳」だった。10 数名の子どもたちが、屋根も無い路上の一角で真剣に授業を聞いていた。



チャイルドホープでのオリエンテーション



青空教室の現場へ

授業中、自分の身の上を語りながら泣き出す子どもいたが、周りの子どもたちが肩を抱いて慰めていたのが印象的だった。路上生活をしながらも、チャイルドホープ等の支援を受けて大学に進学した子どももいるとのことだった。授業が終わった後、ツアー参加者全員で自己紹介して、MAO コミュニティでも披露した「妖怪体操」を披露した。思いのほか盛り上がり、アンコールの要請があったので、子どもたちも一緒になって踊った。



真剣に授業を聞く子どもたち



踊り（妖怪体操）で子どもたちと交流

ストリート・エデュケーションを見学した後、ミンダナオ島の先住民族が経営するフェアトレード・カフェに行き、夕食を取った。メニューは軽食がメインだが、フェアトレードのジャム等のお土産品も豊富で人気があるらしい。



フェアトレード・カフェ①



フェアトレード・カフェ②

3月1日（日）

8：00－12：00 イントラムロス見学

7:30 にホテルロビーに集合し、車でイントラムロス（16 世紀にスペイン人たちによって建設されたマニラの最古の城塞都市跡）へ向かって出発した。イントラムロス到着後、サンチャゴ要塞を見学した。フィリピン独立の英雄であるホセ・リサールが幽閉さ

れて最終的に処刑された場所であり、現在はホセ・リサールの記念館が建てられている。参加者全員で記念館を見学し、フィリピン独立の歴史を垣間見ることができた。またフィリピン独立の際、多くの女性兵士や女性指導者が活躍したことを知った。



サンチャゴ要塞



ホセ・リサール記念館

ホセ・リサール記念館の後は、世界遺産に指定されているサン・アグスチン教会を見学した。イントラムロスの建造物は第二次世界大戦の際、そのほとんどが破壊されたが、このサン・アグスチン教会だけは破壊を免れたとのこと。ゴシック様式の荘厳な建造物で、フィリピンに現存する最古の石造りの教会である。フィリピンにはスペイン統治時代の影響を感じさせるものがたくさん現存している。



サン・アグスチン教会外観



サン・アグスチン教会内部

14:00-16:00 ナボタス市のスラム街訪問

今回のツアーでガイド的な役割をはたしていただいたハリエッタさんという女性は、KPAC という NGO に所属している。KPAC は国連ミレニアム開発計画が進める MDGs の普遍的な初等教育の達成（2015 年までに、すべての子どもたちが、男女の区別なく、初等教育の全課程を修了できるようにする）を支持し、フィリピン各地で就学前教育、青少年教育を実施している。今回は、KPAC がマニラ首都圏にあるナボタス市のスラム街で行っ

ている支援活動に参加した。

この日はスラム街の清掃活動が行われており、ツアー参加者で4グループに分かれて清掃ボランティアを体験した。住民の皆さんと一緒に箒とチリトリを持ってごみを集め、それをゴミ袋に入れて指定の処分場所まで持っていった。

スラム街の近くにはマニラ湾に面した東南アジア最大の漁港があり、住民の約7割が漁業に従事している。その多くは1日2ドル以下で生活をしており、教育や医療などのサービスを十分に受けることができない状態であるとのことだった。清掃ボランティア終了後、スラムに住む少年少女たちに複雑に入り組んだスラム街を案内してもらった。



スラムの様子



スラムの清掃活動

スラム街というと、もっと荒んだイメージを持っていたのだが、中央広場のバスケットコートでは子どもたちが元気に遊んでおり、街の中には食料品店や雑貨店、ゲームセンターやフィットネスクラブまであった。下水処理等の衛生状況はあまり良くないようだったが、想像以上に活気がある雰囲気に驚かされた。

この地区はスラムの中でも比較的恵まれた環境らしく、巨大なゴミ捨て場だったスモークーマウンテン周辺には、もっと劣悪な環境で生活している人がいるとのことだった。参加者の感想として、貧困の問題について色々と考えさせられたという意見が多かった。

3月2日(月)

8:30-12:00 Mano Mano 訪問

フェアトレード生産者団体「Mano Mano」を訪問し、活動内容に関するオリエンテーションを行った。フェアトレードとは、伝統的な手工芸品や農産物を公正な価格で取り引きし、不当な搾取を受けている発展途上国の人々の経済的・社会的な自立を支援する運動である。

フィリピンでフェアトレード活動を行う Mano Mano は、1966年に教会のシスター、ジェリアン・マリア氏によって設立された。スタッフの多くは女性で、社会的企業として

「小規模生産者の自立を目指し、知識やスキルを共有し、自立したコミュニティを作る」ことを目的としている。小規模生産者を自立させるために、チームワークやリーダーシップ、会計などを教育し、コミュニティの組織化を進める「保健プログラム」、「給食プログラム」、「歯科プログラム」を実施している。1日1ドルで生活する水しか買えない最も貧困な層が、せめて食べ物を買えるようになることを目標に支援活動を行っているとのことだった。



Mano Mano 外観



創始者のシスター・ジュリアン・マリア

設立当初はマニラ麻を使った製品をメインに取り扱っていたそうだが、単に製品を買い取って販売するだけではなく、優れた民芸品・工芸品等を製造・販売するビジネスモデルを Mano Mano から生産者に提案する方向にシフトしている。現在は、ブラジリアン・バッファローを飼育してミルクを販売するビジネスの支援や、有機栽培の米づくりの支援も行っている（生産物は Mano Mano が買い取り）。

通常、3年から5年間かけて小規模生産者の支援を実施し、最終的には生産者を自立させることを目標としている。独立に成功した生産者の割合は50%程度とのことだった。今まで25ヶ所の生産者コミュニティを支援してきた実績を持っている（現在、支援進行中なのは11コミュニティ）。



Mano Mano でのオリエンテーション



Mano Mano の皆さんと

さらに、Mano Mano では生産者とのパートナーシップに基づく貿易ビジネスを行っており、インポートフェア等を活用した海外市場への進出にも力を入れている。主に竹細工やバナナチップ加工業、ココナッツを使った民芸品などを扱っており、生産者（パートナー）から製品を買い取る場合は、最初に前金として半額渡して、これがパートナーにとっては原材料購入費となっている。さらに、パートナーに対して技術訓練やスキルアップセミナー等を実施しすることで、長期の関係を築くように努めているとのことだった。

オリエンテーションの後、Mano Mano の事務所を見学させていただいた。1階の販売所でフェアトレード製品を購入できるようになっており、バッグやアクセサリなどの民芸品をお土産として何個か購入した。

13:00-17:00 キャピット・バハヤン小学校訪問

一旦ホテルに戻って昼食を取った後、公立小学校のキャピット・バハヤン小学校を見学した。



キャピット・バハヤン小学校



エスメラルダ校長先生

この小学校では1年生から6年生まで4842人が在学するナボタス市でも2番目の大規模校である。教師は120名（女性教師112名、男性教師8名）が勤務しており、教室は100以上ある。児童数が多いためか、6時から12時までと12時から18時までの2部制になっている。公立なので授業料は無料（親は制服代と食費のみ負担）で、特別支援学級も設けられている。給食作りには児童のお母さんたちも協力しているとのこと。フィリピンの小学校では家庭の事情等で中退する子どもも少なくないが、キャピット・バハヤン小学校は低所得層の児童が多いにもかかわらず中退する生徒は少なく、99.1%の生徒は無事に卒業しているとのことだった。校庭にはリサイクルボックスが設置され、児童たちによってペットボトルが分別収集されている。

また、敷地内には幼稚園が併設されており399人の園児が通っている。この日は園児がお休みの日だったが、園内で打ち合わせをしていた先生たちから歓迎を受け、園児の描いた絵や工作などを見せていただいた。



小学校児童の皆さん



校庭に設置されたリサイクルボックス

3月3日（火）

7：30－13：00 ミリアム大学訪問

スタディツアーのプログラムもついに最終日を迎えた。朝、みんなで駅まで歩いて電車に乗ったあと、フィリピン独自の乗り合いバスである「ジプニー」に乗り換え、ミリアム大学に向かった。



駅に入ってくる電車



ジプニー乗り場

フィリピンの道路には改造されたジプニーが何台も行き交っている。約20円／人程度でジプニーに乗車できるのだが、定員は在って無きが如くで、狭い車内に次々に人が乗り込んで来て、車内はすし詰め状態になった。最近は電車や乗り合いタクシーの利用が増えて、ジプニーも減少しているらしいが、それでもマニラの主要な交通手段のようである。しばらくジプニーに揺られて、ミリアム大学に到着した。

ミリアム大学はユネスコのジェンダー活動拠点校に指定されており、ボランティアなどの市民活動や環境活動、平和活動が盛んである。大学内にあるジェンダー女性学研究所（WAGI）を訪問し、フィリピンにおけるジェンダーの現状について、WAGI所長のオイ教授から講義していただいた。



ミリアム大学入口



WAGIでのオリエンテーション

フィリピンはジェンダーギャップ指数においてアジアトップのランキング（2014年度で世界第9位）であるが、社会における男女格差はまだ解消されていないとのことだった。企業の女性採用はまだ少なく、賃金も依然安い傾向にある。女性は農業などに従事することが多く、政治の分野で女性議員が増えているものの、多くは有力男性政治家の妻や娘が占めている。

質疑応答の時間、オイ教授に「フィリピンはジェンダーギャップ指数のランキングがアジア第1位です。このランキングについてどう思いますか」と質問したところ、「個人的には、ジェンダーギャップ指数はたった4つの評価指標しかなく、あまり正確ではないと感じている。フィリピンは世界ランキング9位となっているが、実質的には40位～50位くらいが妥当ではないか」とのこと。その後「ただ、教育分野に関してフィリピンは進んでいると思う。フィリピンではまだ貧しい家庭が多く、子どもに土地やお金は残せないが、子どもには立派な教育を受けさせたいと考える人が多い。これは制度的な保障から生まれたものではなく、昔からフィリピン人が持っている文化的な思想である」とおっしゃっていたのが印象的だった。



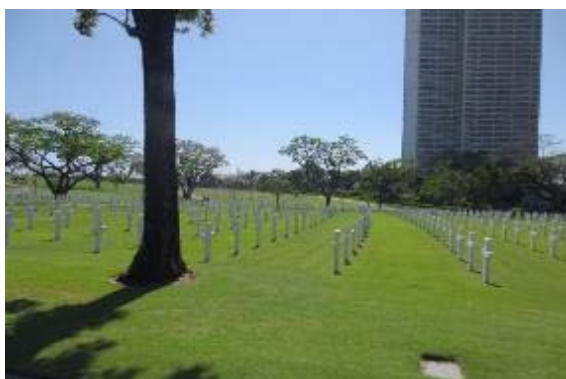
オイ教授の講義



WAGIの皆さんと

14:00-19:00 アメリカ軍記念墓地ほか

ミリアム大学の学食で昼食を取った後、車で移動しながら、アメリカ軍記念墓地を見学した。第2次世界大戦中、フィリピンで戦死した1万7000人以上のアメリカ人軍人の遺体が眠っているそうである。中央には記念塔が建ち、記念塔の周囲に白い十字架が並んでいる。記念墓地を見学後、フィリピン最大のショッピングモール「モール・オブ・アジア」に寄ってからホテルに戻った。



アメリカ軍記念墓地



モール・オブ・アジアの内部

ホテル到着後、参加者全員で部屋に集合して反省会を行った。一人ずつツアーの感想や印象に残った出来事などを語り合った。

参加者からの意見・感想

- ・普通のツアーでは絶対に行けない MAO でのホームステイなど貴重な体験ができた。
- ・現地の人とのコミュニケーションの機会が多く、一生の財産となった。
- ・貧困が子どもたちに与える影響は深刻だと感じた。
- ・先住民族やスラム街の子どもたちとの交流は大変有意義だった。
- ・衣食住のありがたさや、学校に行けることの素晴らしさを痛感した。 など

3月4日(水)

6:45-14:30 日本へ帰国

早朝、ホテルロビーに集合し、車に乗ってニノイ・アキノ国際空港へ向けて出発した。定刻どおり 9:45 にマニラを飛び立ち、14:15 に福岡空港に到着した。

9泊10日のスタディツアーで、フィリピンで様々な団体、様々な人たちと出会うことができた。フィリピンが抱えるジェンダーや貧困の問題について考えさせられると同時に、経済発展が進むフィリピンの活気を肌で感じる事ができた。

参加者レポート

参加者レポート①

スタディツアー「フィリピンで学ぶ国際協力」に参加して

中尾 啓子

2月23日（月） 福岡国際空港集合→マニラ

福岡空港にて初めて全員と顔を合わせる。昨年は2時間も飛行機の出発が遅れたそうだが、今年はスムーズに出発。空港到着後2つの車に分かれてトロピカーナホテルへ。その後まずは両替できる場所を探して3件目でやっと完了。ホテル横の中華料理店での夕食。みんなでシェアして美味しかった。

2月24日（火） プレダ基金へ

超暑い車中に耐え3時間半かけてプレダ基金に到着。共同設立者のアレックス神父のレクチャーを受ける。Better FiripinのVisionのもと、マルコス政権の戒厳令時代にプレダを設立。その志と瞳の美しさに感動。「なぜこの基金を作られたのですか？」との質問に「神の啓示です。」と答えられた。美味しい昼食の後、カレン神父が自らハンドルを握り、町を案内してくださった。印象に残ったのは、フィリピンの上院議員12名が声をあげ憲法に「基地を作らない」と明記し、アメリカ軍が撤退した記念碑が建っていたこと。強い意志を持てばそんなこともできるのだと感動する。

2月25日（水） 少年の家訪問→アエタ族 MAO コミュニティ

午前中少年の家へ。その生い立ち故に罪を犯してしまった子どもたちなどを保護。Emotion roomは全体が黄色っぽい部屋で、壁と床にはクッション性の敷物。この部屋で泣いて怒りを吐き出して自分をとり戻してゆく少年たち。男の子は特に感情を出しづらい面も持つ。畑を案内してくれた時や、一緒にフルーツバスケットのフィリピン版ゲームをした時の笑顔には「国は違っても子どもは変わらないなあ」と感じるが、今までどんなにつらい目にあってきたのだろうか。建物前に咲く美しい花や、広い敷地に広がる緑を見ながら、いろいろ考えさせられた訪問だった。

市場で買い出しをした後、いざMAOコミュニティへ。ここはこのツアーで一番楽しみでもあり、不安でもあるところ。地主さんの土地を通ると近道だけど、通してもらえるかはその日次第。運よく通れたものの、すぐに砂にタイヤがめり込んで車がストップ（乗っているのはプレダ基金のジブニー）。すると、すぐそばの川で工事中の仕事に従事していた男性たちが何人も来てくれて、車を押ししたりシャベルを使って出やすくしたりで、すぐに脱出！なんと親切なフィリピンの人たち！

MAO 到着後村長の話聞く。森の精霊と星を信じ、祖先からの伝統を受け継ぐ生き方に共鳴する。私はその精霊に呼ばれてここに来たのかもしれないと感じる。ホームステイ先での夕食の鶏の煮込みスープが美味。フィリピンに来てずっと食事に恵まれているなあ、感謝！

2月26日（木）MAOでの活動→交流会

昨夜は犬の鳴き声とちょっと寒いこともあり、何回も起きた。パンの朝食後、ガバドン（村長をこう呼ぶ）の家へ集合、湖に向かう。堀内理事長が買い出しに行かれたため通訳を由佳さんがやってくれる。いろいろな薬草の説明を所々で聞いて、2時間半掛かってやっと川の上流の小さな池へ。湖はまだ遠いのでここで終わり。水着は持ってなかったけど、池に飛び込む。小学校5年まで唐津や背振の山の中で育った私には、プールよりも川で泳ぐことが自然。潜ると子どもの頃の感覚がよみがえる。服は村に着くころにはほとんど乾いていた。

シニガンの昼食後、小学校訪問。正面の建物はヨーロッパ系からの寄付で建設され、幼稚園から3年生まで。右の建物は韓国からの寄付により建設され、4・5年生が使っている。国の制度が高校卒業を16才から国際基準の18才に変更してまだ2年らしい。この村もほとんどが小学校3年までしか出ていないけれど、5年まで村で教育を受けることができるようになった。6年生や中学生以上は川向うまで行かねばならない。雨期は学校まで通うのがたいへんなようだ。

夜は交流会。たくさんの村人が集った昨年と違い、今年は私たちとホストファミリーのみのこじんまりしたパーティー。最初に村長が「私たちはいつでもあなた方を待っている。日本に帰ってもここを思い出してほしい。この3日間は始まりに過ぎない。この場を持てたことに感謝する。」と挨拶。次に村長の指名で由佳さんと平井さんが挨拶。平井さんの最後の言葉「村の人たちと森の精霊に感謝します。」が素敵だった。その後、村長やホストファミリーによる歌が披露された。私たちも『見上げてごらん夜の星を』の合唱や妖怪ウォッチの体操で盛り上がる。あとはビールを飲んだりしながらおしゃべり。美南さんが大学で「妖精学」というちょっと怪しげな講義を受けているという話で盛り上がったけれど、この村にいるとまんざら妖精の話が変だとも思わなかった。最後に理事長が挨拶をされ、楽しい宴は幕を閉じた。

2月27日（金） MAO→少女の家→ブレダ→マニラ

朝の集合前に散策。木々の間から差し込む光が、美しく幻想的。ラーメンの朝食後ガバドン宅集合。別れの挨拶でガバドンから肩をギュッと抱かれて、その指の力に、ぐっとくる感じ。ホストファミリーのママとも別れの握手とハグ。「本当にお世話になりました。料理もどれもとてもおいしかったよ。」と英語やタガログ語で言えないつらさ。

次の視察先の「少女の家」へ。ここは性的搾取・虐待を受けた少女が普通の生活を営み回復するための施設。通える子は車で20分の学校へ通う。私たちが訪問したのは午前中だったため、ホームエデュケーションの7~18歳十数名が滞在。2FにはEmotional roomがあった。建物の周りのピンクの花、風に揺れる彼女たちの洗濯物を見ながら、彼女たちの学習の邪魔をしないように早々に施設を後にした。

プレダで今までで一番美味しいランチの後、マニラへ。行きとは違い、冷房の効いた快適な車に揺られトロピカーナホテルへ。思い思いの夕食の後、8時からの参加者交流会へ。一人ひとりツアーに参加した理由と感想を述べる。メンバーの言葉がそれぞれの思いがこもっていて、「話すって大事。みんな素敵なお人たちだな。」と改めて思う。理事長の博学も素晴らしく、30分の予定が1時間30分も話し込んだが、心地よく温かい時間を共にすることができた。

2月28日(土) DAWN→チャイルドホープ→マニラ湾夕陽→カフェ

日比国際児とその母親たちを支援しているNGOのDAWNへ行った。DAWNの親子と交流&ランチ。「What's your dream?」の質問に、「ソーシャルワーカー」「ソフトの選手」「ゲームクリエイター」「宇宙飛行士なれなかったらロックバンドのギタリスト」など夢の多い答えが。平井さんは一人の少年と好きなベースギタリストの話で盛り上がっていた。DAWNのお母さんたちの職業訓練でもある織物のようすも見せてもらい、製品も購入。

チャイルドホープでは、日本から来た別のNPO団体と一緒にレクチャーを受ける。その後、実際にストリートでの支援活動を見学。歩道の端の少し高くなったところに腰かけて、ソーシャルワーカーの方が先生となり「value」についての学習がされる中、泣き出す子が何人もいる。家族についての話題に涙したらしく、虐待などどれだけつらい思いをしたのかと思う。ソーシャルワーカーの方が、抱きしめてフォローしてらした。ストリート・チルドレンでありながら、専門学校へ通う子も後から到着。彼自身の努力もすごいし、彼がこの子たちのあこがれであるだろうと思った。

マニラ湾で美しい夕陽を見た後、ミンダナオ島先住民のカフェへ。ケーキを食べて、お土産も購入。両替と買い物の後、同室の優里さん・由佳さんとホテルの部屋で語り合う。「この国の貧困を無くしたい。そのためには何をしたらよいのか。」と熱く語る二人。「いい子たちだなあ。若いっていいなあ。」と思う夜だった。

3月1日(日) マニラ市内観光→ランチ→スラム訪問→公園

フィリピンの英雄ホセ・リザールが囚われ、処刑場へと向かった足跡の残る要塞都市跡へ。医者として、また世界各地を巡り祖国の独立のために尽力し、夢を果たすことなくこの世を

去った彼。その足跡をなぞりながら歩いてみると、心が沈んでいくようで、彼の無念さが伝わってくるような気がした。程よい甘さのハロハロとちょっとリッチなランチの後、スラム街へ。4つのグループに分かれて軍手とごみ袋を持ち、いざ清掃へ。さまざまな臭い、迷路のような作り、あちこち流れる濁った水、犬・猫・鶏、昼寝中の親子・・・テレビを見たり、ゲーム（昔日本のゲームセンターにあった大きなタイプ）に向かう子どもが多いことにも驚く。笑顔の子どもたち、バスケットに興じる青年たち・・・幸せっていったいなんだろうと考えた。

3月2日（月）フェアトレード訪問→昼食→公立小学校訪問

フェアトレード生産者団体 Mano Mano。ここでも VISION/MISSION が明確で、レクチャーして下さったマネージャーの方が、私たちをしっかりと見て話される目がとても澄んでいた。出来上がった製品を見学させていただくと、貝製品やウィンドチャームなどすばらしく、その後メンバーはたくさんのお土産を購入した。美しいものを買えたこと、そしてそのお金が生産者の方に渡ることをうれしく思った。

午後は公立小学校へ。女性の校長に説明案内してもらおう。ここでも全小学校 VISION/MISSION があり、「熱心に国を愛する子どもを育てる」というところに、日本の新教育基本法に掲げられた「国を愛する心」という条文が重なり、ちょっと嫌な感じがする。コカ・コーラの援助で value プロジェクトが組まれていたり、校内にハンバーガーのジェリビーマスコットのポスターで「きれいにしよう」と貼ってあったり、公立なのに企業の援助を受けていることに違和感を覚える。ナボタス市でも有数の大規模校のキャピットバハイアント小は、児童数がなんと 4842 名の 2 部制。ほとんどが低所得層の家庭の子どもたちと聞くが、白いシャツに紺色のスカート・ズボンという制服のせいも、あまり貧しさを感じない。1 クラス 50~60 名くらい。（30 人学級の実現のために毎年活動署名集めや議員面談をしている私にはとてつもなく多い驚きの人数！）フィリピンの多くの小学校で中途退学が多い中、99.1%が卒業するというのも驚き。給食プログラムも政府が行う幼稚園から 3 年生の他に、この学校独自で 4 年生以上もやっており、なんと母親 5 名ほどで作って洗い物まで担当しているとのこと。特別支援クラスの子を「mental challenger」（精神的な挑戦者）と呼ぶのも、いいセンスしているな、と思った。最後に訪れた幼稚園クラスは、子どもたちはお休みで、先生たちが評価の話し合い中。忙しい中にも歓迎していただき、すり減ったクレヨン、リサイクルの入れ物、壁にびっしりと貼られた子どもたちの作品を見せてもらう。その笑顔の明るさにこの仕事への誇りが感じられた。私たちが折り紙や折り方の本をととても喜ばれ、お礼に赤のハートや花のスティックをくださった。

夜は香純さんのご厚意に甘えて、手作りのうどんとたまねぎのかき揚げをごちそうになった。

3月3日（火） ミリアム大学訪問→巨大ショッピングモール→夕食→反省会

鉄道とジプニーでミリアム大学へ。この大学のジェンダー研究所は、市民活動・環境問題にも熱心で、「平和と女性」という点に置いて力を入れており、ジェンダーとしてはアジアで拠点となる研究所である。プログラムコーディネーターの女性がかわしく説明してくださった。若い女性のリーダーシップ教育も重要事項の一つで、現職の大使や芸能分野で活躍する卒業生も多いとのこと。講義の半ばから合流されたオイ所長。国連や大統領諮問機関などの要職を務めていらっしゃるという方で、その威厳とオーラに圧倒された。

アイススケート場もあるアジア最大のショッピングモールで買い物を楽しんだ後、参加者全員でフィリピン料理の夕食。どれも美味しく満腹となる。夜は最後の反省会。由佳さん真由さんが手作りのアイスを作ってくれた。（材料のお芋はMAO コミュニティでホストファミリーにいただいたもの）ビールなどいただきながら、一人ずつ感想を述べる。皆さんこのツアーで出会ったさまざまなプログラムと人々に感謝の気持ちを語っていた。

3月4日（水） マニラ→福岡空港

すべてが順調のまま、帰国。10日間の旅は終わってみればあっという間だった。出発前は、現地の治安など不安があったものの、訪れてみれば一人で散歩や行動ができる素敵どころだった。ただそれもツアーで連れて行っていただき、安全に過ごすために必要なことをきちんと教えてもらって、それを守れたからだろう。

1枚のパンフレットを手にとったことから始まった今回の旅。「直感で惹かれた私の感覚は正しかったなあ」とつくづく感じた帰りの電車の中。こうしてパソコンに向かっていても、まだ優里さんや由佳さん、みんなの声が聞こえてくる気がする。10日間一緒にいた余韻は当分続くのかもしれない。ツアーに参加しなければ、決して出会うことのなかった雲の上の存在の堀内理事長。公務員とは思えない多くの趣味を楽しむ平井さん。彼のキャラクターが堅苦しくない旅を演出してくれたと思う。いつも私たちのそばにいてくれたハリエッタさん。片言の英語にも辛抱強く笑顔でいつも答えてくれた。あまり話す機会のない女子大生とさまざまな話題について、語り合う機会も素晴らしかった。日本の若い人たち（彼らはけっこう優秀だと思うが）ってけっこうやるなあ。

多くの出会いと学びに感謝！サラマポー！

参加者レポート②

スタディツアーの感想

出口 香純

きっかけは、職場のチラシの回覧だった。「スラム街を訪問する」という部分に惹きつけられ、自分の目で見てみたい・・・という気持ちが高まり、職場の同じ系のメンバーに休暇を取る相談をし、参加することにした。

初日は 20:00 少し前にホテルに到着。20:30 頃、両替等のためホテルから出かけた途中で幼い子二人を抱え、紙コップを持つ女性を見た。胸が痛くなる。もうここは日本ではない。

2 日目。ブレダ基金での英語によるオリエンテーション。先住民族の支援や対象を子どもに絞った法的支援やカウンセリング、セラピーなどを行っている。基金は、先住民族の支援につながるドライマンゴーのフェアトレード等で運営されており、常に各国からのボランティアがいるとのこと。私たちが滞在中もドイツ人やカナダ人、韓国人のボランティアがいて、会話は英語。国際協力には英語が必要だと感じた。

3 日目。午前中は、少年の家を訪問。ここにいる多くの少年たちは、生きていくために盗みなどをして刑務所に入っているところを救出されたとのこと。中には家庭崩壊のために入所している子も多い。施設は十分余裕があるように感じた。去年は 80 名ほどいた少年たちが今年は 40 名ほどに減ったらしい。これは同じような施設がたくさんできたためとのこと。卒業してスタッフとなった子もいて、私たちの運転手をしてくれた青年もその一人。

午後、先住民のホームステイ先に到着。私のホームステイ先は、子育てを終えた祖父母世代の方々の家だった。驚いたことに、電気が通っており、テレビが娯楽の一つであるようだった。親切でとても気をつけていただいているのを感じた。タガログ語（せめて英語）をもう少し勉強していたらもっと充実したものになっていただろう。夕食は、チキンのスープとライス。ホストマザーが作ってくれた料理は美味しく、日本人も好きな味。

4 日目。MAO 村のリーダー、ガバドンさんに森を案内してもらおう。途中、薬となる植物などについて熱心に説明してくれた。道中、植林された苗木がたくさんあった。美しい川に到着。水浴びなどをして折り返した。カシューの実を初めて食べた。とてもジューシー。カバドンの家に着いて、カシューナッツを煎ってもらい食べた。普段食べるナッツとは別物で、柔らかく自然の甘みがありとてもおいしかった。ホームステイ先のホストファーザーが同行した川でいつの間にかエビを獲っていたらしく、夕食にエビのソテーがでてきた。身が締

まってとてもおいしかった。夕食はそれに加えて、豚のスープとライス。

ホームステイ先では、子どもにいたるまで資源を大切にする気持ちが浸み込んでいた。例えば、食事の時の皿の使い方、手を洗うときは、洗った水はジョウロに貯める。“SAY, MOTTAINAI” などというフレーズがあったが、ここでは必要ない。自分の日常を振りかえらされた。たまに村には不似合いな菓子の空き袋などが落ちているとその最終処分については気になるが、環境への負荷は低い生活がある。

5 日目。MAO 村を出て、少女の家に行く。性的虐待や搾取による犠牲となった子どもたち。最年少は 7 歳。交流での少女たちは、明るいが、ここへ来た背景を知ると痛々しい。ブレダ基金で昼食後ホテルへ。夕食後ミーティング。自己紹介やツアーへの参加理由などを語り合った。

6 日目。徒歩で DAWN へ。日比国際児、母親との交流と昼食。子育てが落ち着き退職したら、恵まれない環境の子どもたちの手助けのような事をしてみたい・・・と考えていたので、オリエンテーションを聞いて、ヒントをもらった気がした。シクハイ製品のお土産を買う。日本の技術を取り入れ、品質のよいものを作っている。値段は高くても品質が良い方がリピーターも増えるとのこと。

午後、チャイルドホープへ。オリエンテーション後、ストリート・チルドレンと交流。子どもたちは実年齢よりかなり小さくみえる（栄養不良か？）。少年の家で一人の少年に年齢を尋ねたが、分からないと答えられた事を思い出した。チャイルドホープでは、そのような子どもの戸籍を作成する手助けをしたりするのだろう。子どもたちの中には、ホームレスのまま支援を受けて大学に進学している子もいることに驚いた。

その後、マニラ湾の夕焼けを見に行った。夕日はとても美しい。ただ足元にごみが散乱しているのが残念だ。先住民によるカフェを見学し、そこで夕食。日曜日は午前中しか開店していないということで、一日早く訪れた。自宅用にカラマンシージュースを購入。

7 日目。午前、イントラムロス観光。ハロハロを食べた。その後ユネスコ世界遺産 San Agustin Church を訪問し、昼食。

午後、スラム街訪問。清掃活動を行う。案内してくれたデヴィン君は、明るく堂々としていてはっきりとした英語で積極的に話しかけてくれた。交流には大切なこと。私も頑張ろうと思った。スラム街のごみの多さにも驚いたが、それ以上に子どもたちの数の多いことに驚いた。また、日曜日という理由だけではないと思われる大人の男性が多くいた。仕事がないのだろうか？留学生の話によると、スラム街の子どもたちはほとんど学校に通っているが、親の意識の低さから学校に行かず家で過ごしているという子もいるとのこと。親は子どもの面倒を見ないというわけではなく、子どものために自宅でできる“サリサリ”などを経営しているらしい。この“サリサリ”は主に女性が経営しているが、赤字で、資金を高利貸し

に借りることが多いらしい。また男性に仕事がないので家計が苦しいとのこと。

夕方、ホテルに戻り、近くのスーパーへ買い物にでかけた。20:00 ホテルの近くのマッサージを体験(300 ペソ)。

8 日目。午前、フェアトレード団体、Mano Mano を訪問。概要説明を聞き、輸出用の工芸品を見学した。団体加入には 70,000 ペソ必要で、支払えない人もいる。加入しなくてもフェアトレードの 10 か条を満たしていれば、フェアトレード商品と名乗ることができる。Mano Mano からの支援を卒業したフェアトレード生産者の成功率は 50%。生産者から Mano Mano が製品を一括購入するシステムとのこと。フィリピンの人口の 1/4 が貧困層であることに驚いた。“貧しい”人とは、1 日 1 ドル 25 セント以下で暮らす人々。Mano Mano のスタッフは、貧しい人々の自立を支援している。Mano Mano で貝細工と箒を購入。かなり安い。輸送代金を含まないからだろうか？

午後、公立小学校を訪問。児童数約 5,000 人の 2 部制の大規模小学校。給食に力を入れており、児童の母親 4～5 人が幼～3 年生の 2,000 人の給食を作っている。また職員用の生協の利益も給食事業に一部充てており、学校をあげて給食事業に取り組んでいる。また、授業に出てこない子どもには家庭訪問を実施し、ADM と呼ばれる家庭で勉強した結果を提出すれば履修を認めるなどして、卒業率を 99.1%にまで上げている。ナボタス市第 2 の大規模校であり、先進的な学校である。校長は女性で男性教員は 120 人中 8 人。男性教員は少ない。

9 日目。電車に乗ってミリアム大学へ。ジェンダー研究所があり、スラム街の幼稚園でのボランティアなどの市民活動にも熱心で、平和活動や環境問題にも取り組んでいる。ユネスコのジェンダー研究所に指定され、多くの女性リーダーや芸能人を輩出している。オリエンテーションではジェンダーについての説明、フィリピンの現状や問題点について詳しく解説してもらった。出稼ぎ労働者の多くが子どもの学費のためであることに刺激を受けた。

10 日目。帰国。充実した 10 日間だった。観光旅行では決して味わえない刺激をうけたと思う。ツアー中他のスタディツアーと合流することがあったが、改めてこのツアーの質の高さを実感する機会となった。それは堀内理事長の人柄、広く深い知識による解説によるものが大きい。また、スタッフの方にも臨機応変にスケジュールを組み直して無駄なく動けるよう調整していただいているのも感じた。今後のツアーも気になる。

参加者レポート③

フィリピンはとても豊かであたたかい国

服部 優里

「フィリピンはとても豊かであたたかい国」、それがフィリピンを訪問したあとの印象。実際に行く前は、貧しくて生きるには過酷な国なのではないか、そんなふうに想像していた。確かにそういう環境にいる人も少なからずいるだろう。物乞いをしている人や道端で寝ている人、靴すら履いていない人を何度となく見かけた。そのような人たちの暮らしは、やはり楽なものではないと思う。

でも、私の想像していた以上にフィリピンの皆さんは豊かだと感じた。「豊か」とは経済的なことではなく、「心」のこと。

MAO コミュニティでは小学生の女の子たちがお花と歌をプレゼントしてくれ、プレダ基金が運営する HOME FOR BOYS の少年たちはタガログ語を教えてくれた。ナボタスのスラムの子どもたちは清掃活動を手伝ってくれ、積極的に話しかけてくれた。あの日々を振り返って思い浮かぶのは、一緒に過ごしてくれた皆さんの笑顔ばかり。

たしかに経済的には私たちの方が豊かかもしれないが、それはあまり意味のない物差しのようと思う。今の日本は残念なことに、コミュニティの力も家族の絆も弱くなっている。一方でフィリピンの人たちは誰かと寄り添って生きている。家族、仲間、コミュニティの人、ソーシャルワーカー、先生、様々な「誰か」と寄り添って生きている。

チャイルドホープが行っているストリート・チルドレンを対象にした授業中の出来事。ある男の子が話し始めると、みんなが一斉に泣き出してしまった。タガログ語なので理解ができず、ソーシャルワーカーさんに事情を尋ねた。すると「家族の話になったからみんなが泣き出した」と教えてくれた。ストリート・チルドレンの約 85%が崩壊した家庭の子どもたちだという。そんな状況で「家族」に対するいろんな思いが込み上げてしまったのだろう。みんな泣きながら、互いの背中を摩り合って、涙が止まらない子は先生にハグしてもらって徐々に落ち着きを取り戻し、授業が終わる頃には笑顔を見せてくれる子も何人もいた。きっと、ひとりぼっちだったら辛くて淋しくて耐え難い状況だと思う。でも仲間や先生、ソーシャルワーカーさんがいるから彼らもなんとか頑張ることができるのだと思う。

私たちはフィリピンでたくさんの「友達」に出会ってしまった。魅力的で、優しく、あたたかい人たちがいることを知ってしまった。これから「フィリピン」という単語を聞く度

に、バナナを食べる度に、ヤシの木を見る度に「友達」のことを思い出さずにはいられないだろう。日本からフィリピンに想いを馳せて全力で生きよう。出来ることをやろう。大切な「友達」に恥じないように。

ナボタスのスラム街にて



チャイルドホープ授業風景



MAO コミュニティにて



ツアー参加者の感想

感想 1

長いようであつという間の 10 日間でした。参加者の皆さんが良い人ばかりでとても楽しく充実して過ごすことが出来ました。今後も関係を持ち続けたいと心の底から思っています。フィリピンの人たちは日本人と似て「相手をもてなす心」を持っていると強く感じました。タイヤが砂に埋もれたときや、サンダルが壊れたときにも、すぐ助けてくれた姿にとても感銘を受けました。必ずフィリピンに来て恩返しがしたいです。一生の財産になりました！

感想 2

MAO 村でのホームステイ 2 泊がよかった。1 泊ではもの足りず、3 泊すればより交流を深めることができたかもしれないが、普段の生活とのギャップが大きく、2 泊がちょうどよい。個人的には、出発時期があと 1~2 週間早いほうがよかった。6 日目のチャイルドホープでの説明（オリエンテーション）で、他の団体と一緒にになったが、他の団体と比較して、改めてこのツアーの質の高さを感じた。堀内理事長の分かりやすい説明、ハリエッタさんやスタッフの方の手配やフォローが素晴らしかった。

感想 3

語学力に不安を持っていたのですが、現地の方々には理解しようと私のカタコトの英語を聞き取って助けてくださいました。今回同行して下さった堀内理事長、平井さんのサポートにも大変感謝しています。このツアーに参加しなければ一生できないだろう体験も多くあり、本当に楽しかったです。ありがとうございました。

感想 4

今回のツアーに参加して、初めて日本以外の国を見ることができ、とても勉強になりました。大学の授業では他人事のように聞いていましたが、現地に来て、経験したり実感したりすることで、私たちにも深く関係のある問題もたくさんあることや、日本が実施している国際協力がたくさんあることが分かりました。語学の勉強にもなり、本当に参加してよかったです。堀内理事長、平井さん、また他の参加者の皆さんのおかげで本当に充実したツアーになりました。ありがとうございました。

感想 5

貧困などで苦しむ人たちを援助する活動の後ろ盾として、宗教、特にキリスト教が存在することをあらためて知りました。短大時代にキリスト教を学びつつ、カソリックとプロテスタントで争っていながら、愛と平和を願う姿勢にとっても反感を持っていたのですが、今回少し考えが変わりました。仕事柄、宗教特に仏教に興味があるので、今後仕事をしていく上でも、今回のツアーで得たものは役立つと思っています。また、ライフワークとしてNPOで「すべての子どもたちにゆき届いた教育を」を目標に活動しているため、MAOの小学校(公立小)を見学できたのも、興味深かったです。ビジョンとミッションをしっかりと設定し、活動する大切さも強く感じました。最後に、堀内理事長、平井さん、ハリエッタさん、またこのツアーにご尽力いただいた方々、何より旅をともにしてくださった素敵な仲間たちに心からの感謝をささげて、ペンをおきます。サラマ・ポー！！

感想6

バンによる移動が多かったのですが、解説付きで街を歩き回って見たかったです。朝の散歩と夕方帰った後の自由時間だけで街の様子を見て周るのには、時間的に限りがありました。電車とジブニーに乗った体験は楽しかったです。オススメのフィリピン料理や、屋台でのB級グルメ等の情報を、事前に知っておきたかった。

感想7

去年に引き続き参加させていただき、本当に感謝しています。様々な配慮をしていただいたおかげで旅を充分楽しむことが出来ました。今回のツアーでは、去年よりも冷静な視点でフィリピンという国を見られたような気がします。そして、自分にとっても相手にとっても一度きりではない交流は意味があると感じました。また少し成長できました。ありがとうございました。



KFAW スタディツアー2014
「フィリピンで学ぶ国際協力」報告書

発行 (公財) アジア女性交流・研究フォーラム
〒803-0814
北九州市小倉北区大手町 11-4
TEL 093-583-3434 FAX 093-583-5195
URL <http://www.kfaw.or.jp>

発行月 平成 27 年 7 月



〒803-0814 北九州市小倉北区大手町 11-4
北九州大手町ビル 3 階
TEL 093-583-3434 FAX 093-583-5195
Email info@kfaw.or.jp URL <http://www.kfaw.or.jp>